



Title	J.M. Murry のThe Evolution of an Intellectual について
Author(s)	甲元, 健雄
Citation	大阪外大英米研究. 1959, 1, p. 16-23
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/98918">https://hdl.handle.net/11094/98918</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## J. M. Murry の *The Evolution of an Intellectual* について

甲 元 健 雄

John Middleton Murry の初期の評論集 *The Evolution of an Intellectual* は、第一次大戦中やその直後に書かれたものを集めたものであるだけに戦争や、文芸に対する Murry の考えが強く打ちだされていて、彼の批評精神を跡づけるものが最初に取り組むべき好著であるとおもう。

この書の初版は1920年であるが、1927年 Travellers' Library の一つとして再版されたとき、*The Problem of Intelligencia* を省き *A Disappointed Man* と *The Poet of War* の二つを加えたが、書物の題を依然元通りにしておいたことについて Murry はつぎのように述べている。「このような書名は戯批評をうけやすいものだし、この評論集が初めて出版されたときには、この書物はたしかに戯批評をうけても文句はいえなかったのだ。およそ魅力のない題目だが、実は私もかつてはその魅力のないインテリだったのである。そしてこれらの評論は、私がインテリ以外のものとなった苦しい過程の第一段階の記録なのである。あるいは、私は純粋な意味でのインテリではなかったのかもしれない。しかし当時の私は、インテリとして聞こえていたのだ。現在私に好意を示す人人は私を神秘家としてもてはやし、好意を示さない人人は私を奇想家と呼んでいる。しかし私にいわせると、私は合理的な人間になったのだ。」<sup>1)</sup>

1927年といえば、すでに彼の名著 *The Problem of Style* (1922) や *Keats and Shakespeare* (1925) が出版されているし、1928年と1929年には、彼の予言的な評論集 *Things to Come* と難解な *God: An Introduction to the Science of Metabiology* が相次いで刊行されている時期で、彼はその活動分

---

(1) Prefatory Note: *The Evolution of an Intellectual*, Jonathan Cape, 1927 以下 E. O. I. と略す。

野において不動の高い地歩を占めていたにもかかわらず、すでに引用した序文の調子よりしても、彼はこの評論集に強い愛着を感じていたに相違なく、事実 Murry の批評の発展を跡づけてみると、彼の特異な批評の将来を発展させるいろいろな要素がこの書物に潜んでいるし、ヨーロッパの思想を大きくゆすぶった大戦に対する彼の考えもはっきりつかめるようである。

第一次大戦によってうけた Murry の衝撃と焦躁がこの評論集でも つとも生しいことはもちろんであるが、収められた20篇の評論の底流をなす暗いペシニズムの基調は、想像力の敗退 (Defeat of Imagination) であり、さらにこのペシニズム克復へのただ一条の道としての文学への希聖がそれをささえているようである。

Murry によれば '*imagination*' とは結局 '*sympathein*' である。この語はギリシヤ人が考案したものであるが、われわれの悲劇は「この語の観念の魔力がこの語から消え去ったということである。世界はこの語がもはや実存性をもたぬことを学び知り、現代語における '*sympathy*' は、この語がもっていた素晴らしい意図の影にすぎず、その茶番化といってもよい。」<sup>2)</sup> 想像力とは Murry によれば結局同情力であって、精神が物質に挑戦しうる唯一の武器であり、これによってのみ人間は人間各自を分つ肉体的な深淵を乗り越え、隣人としての人間の霊にまで入りこみ、その苦しみをともにすることができるのである。Murry は戦争の本質的な根元を「想像力」と魂の無気力つまり「無想像」との争い」とみるが、これはその本質において不純極るものである。なぜなら「たとえ想像力が勝を制すにしても、それは戦争という大苦痛の代価を払っての勝利であることを知るからである。」<sup>3)</sup> 戦時においては、想像力の豊かな人は一般人から隔離され、一般人との障壁を打破しようとする企ては反逆罪とみなされ、さらに悪い場合には、この企ては気狂い沙汰の極印をおされる。この障壁はますます固められ、想像力をもたぬ人間が戦争の苦痛を嫌程味ってはじ

---

(2) *Defeat of Imagination* (E. O. I. p. 165)

(3) *ibid.* p. 168

めて戦争は終結するのである。しかし悲しいことに、想像力の敗退はこの苦痛の意識を伝える掛橋の役目を果たすることができず、蓄積された苦痛の意識という財宝は、想像力をもつ僅かばかりの人達に、新しい世界——たとえその世界で想像力が支配的にならぬとも——の建設意慾をかきたてるほかは、兵士の胸に保管されたままになってしまう。<sup>4)</sup>

この意味から Murry は、真の戦争詩人として Wilfred Owen を稀にみる想像力の持主として高く評価する。Owen が彼の詩集の序文で、「この詩集は詩を問題にしているのではない。この詩集の題材は戦争であり、戦争の悲哀である。詩が悲哀のなかにあるのだ」<sup>5)</sup> という言葉を、永遠の生命をもつ純粹詩の極致を解く鍵とみて、戦争の悲哀と人間の運命に徹しきった詩人でなければいいえないものであると考えている。

「すべて不朽の詩の源泉は強烈にして圧倒的な情緒にある。この情緒は魂の能力を最大限に発揮して耐えられねばならぬ。詩人の創作はこの情緒を支配することに始まるが、この支配の過程においては、完全な服従こそ絶対的な段階をなすものである。詩人は自らの情緒の深奥に飛びこみ、不思議にも生きかえって浮び上がってくるのである。」<sup>6)</sup> 詩は情緒の自発的な迸出であり、詩の問題は根本的に意識の問題ではない。詩は、あらゆる経験が調和される人間の中心に忠実な行為に始まるものである。詩人の存在はこの貴重な経験によって変化をうけ、「実験のための実験からではなく、自分が述べねばならぬことを最も正確に述べる必要から生れる、新しい理解を包む衣としての韻を探し求めるのである。」<sup>7)</sup> Murry はこの例として、Owen の '*Strange Meeting*' の初めの数行にみられる *assonances* を指摘している。

And by his smile I knew that sullen hall;  
With a thousand fears that vision's face was grained;

---

(4) cf. *ibid.* p. 168.

(5) *The Poet of the War* (E. O. I. p. 86.)

(6) *ibid.* p. 86.

(7) *ibid.* P. 87.

Yet no blood reached there from the upper ground  
 And no guns thumped, or down the flues made moan.  
 "Strange friend," I said, "there is no cause to mourn."  
 "None," said the other, "but the undone years,  
 The helplessness. Whatever hope is yours,  
 Was my life also ; I went hunting wild  
 After the widest beauty in the world,  
 Which lies not calm in eyes, or braided hair,  
 And if it grieves, grieves richlier than here.  
 For my glee might many men have laughed,  
 And of my weeping something has been left  
 Which must die now. I mean the truth untold,  
 The pity of war, the pity war distilled . . ."

Murry が *Keats and Shakespeare* の5, 9, 10章で展開する Keats の精神的発展の帰結、すなわち人間経験の完全受容、いかなる苦難もそれに徹しきることによって克服することができるとする '*Dying unto Life*' の観念、詩は第一義的に意識の問題ではなく人間が運命との対決を迫られてする具体における主客の実践的総合としての詩観などの萌芽が、この Owen 論にみられるのである。

彼によれば、この主客の実践的総合からすべての真の芸術にみられる不思議な単純さが生れてくるのであるが、「この単純さは知性では把握しがたい。なぜなら、これは複雑さを通して表現された単純さであるからだ。知性は複雑さを理解しうるものであって、それ以外のなにものでもない。」<sup>8)</sup> この問題は、Murry の '*Thoughts on Tchekov*' <sup>9)</sup> で巧みに論じられている。

Tchekov was indifferent; but his indifference, as am ere catalogue of his secret philanthrophies will show, was of a curious kind. He made of it, as it were, as axiomatic basis of his own self discipline.<sup>10)</sup>

(8) *The Life of K. Mansfield* p. 8. Constable, 1933.

(9) *Aspects of Literature* p. 76. Collins, 1921.

(10) *ibid.* p. 87.

The classical method consisted, essentially, in achieving aesthetic unity by a process of rigorous exclusion of all that was not germane to an arbitrary (because non-aesthetic) argument. This argument was let down like a string into the saturated solution of the consciousness until a unified crystalline structure congregated about it. Of all great artists of the past Shakespeare is the richest in his departures from this method. . . Tchekhov attempted a treatment radically new. To make use of our former image in his maturer writing, he chose a different string to let down into the saturated solution of consciousness. In a sense he began at the other end. He had decided on the quality of aesthetic impression he wished to produce, not by an arbitrary decision, but by one which followed naturally from the contemplative unity of life which he had achieved.<sup>11)</sup>

*Keats and Shakespeare* の11章は ‘*Soul-Making*’ を論じたものであるが、Soul-Making とは結論的にいって霊性は知性と感性との 総合によって形成されるものであり、人は霊性によってのみ知性で把握しがたい生の神秘を知ることができるということである。Murry は、知性と 感性の総合——知識 と本能の調和——を達成しえた一人として、若くして世を去ったが、病魔との対決により死の恐怖を克服して死の確信を得ることができた生物学者 W. N. P. Barbellion (本名 Cummings) を高く評価し、彼の *The Journal of a Disappointed Man* を Conrad, Wells, Bennett につづく世代の安易な文学の及びもつかぬ幅と深さと真実性をもつ文学作品であると激賞して、Cummings にこそ宇宙と人間との相関関係の表示があるという。Murry の Cummings 論 *A Disappointed Man* と *Keats and Shakespeare* には相関的な考え方が随所にみられるが、その一例をあげると、

Barbellion is a manifestation of the way of the universe with us and of our way universe. One of these is a constant. The

---

(11) *ibid.* p. 80.

necessary adjustment must be made with the other . . . If we could make the relation firm, we should at least have a landmark in the mist, from which we might safely set forth on that ordering of experience which is creation.<sup>12)</sup>

. . . poetry in its highest and purest form is one of the few roads that remain open to the eternal reality that is less directly and less fully expressed in religion. We have lost contact with that reality; and we have to regain it.<sup>13)</sup>

生きんとする人間の生物的本能を無惨にも打ちくだいた大戦の悲劇は、量りしれぬほど大きくなる複雑高度の近代科学の発明に対して、人間の想像力は近代科学によっていささかも増大しないということに帰因する。この不均衡、人間の知識と本能との分裂は人間意識の解体を招くものであり、この自己分裂によってわれわれは大戦をひきおこしたのである。本能と知識は想像力によって調和綜合されるべきであるが、想像力は知性と感性の綜合によって形成される霊性より無限に流れでるものである。<sup>14)</sup>

われわれは人間の全一性 (totality of Being) をとり戻し、人間生存の有機的な過程を復活させねばならぬ。God は結局この有機的な過程の探究であって「有機体としての世界」(the world as organism) と「変種としての価値」(value as variation) という二個の生物学的概念を用いて Murry 独特の世界像の表明であり、宇宙をキリスト教的に「自然」と「超自然」に両断することなく、「生物学的なもの」と「生物形而上学的なもの」との連続においてする宇宙の包括的統一の主張であるが、われわれはこの *A Disappointed Man* に、Murry が最後に到着したとおもわれる、彼の神と宇宙の観念の原型をみる

---

(12) E. O. I. p. 80.

(13) *Keats and Shakespeare*, p. 144. Oxford, 1935.

(14) cf. *The Sign-Seekers* (E. O. I. p. 13.), *The Nature of Civilization* (E. O. I. p. 172.)

ことができる。さらに *God* は、D. H. Lawrence の神秘道を探究しようとするものにとっても有益な導きとなるであろう。

戦争の教訓によって、文学はなににもまして想像力の必要を痛感する。あらゆる知識がもはやわれわれになんの助けにもならぬときがきた場合、必要なのは、敵対矛盾する個々の事物を綜合統一する完全な想像力でなくてなんであろう。だから文学は最も人間的であると同時にまた最も非人間的なものでなければならない。

It (Art) is the most inhuman because its beauty is indifferent. It annihilates all standards and all aspirations but its own (and it may be that in the last encounter it annihilates even them). Our universe of hopes and fears is but one changing facet of the great clear-shining jewel which the artist alone sees face to face, and we in his mirror. It also the most human, for the artist is a sacrifice to the dumb aspiration of the world. In him the age-long effort of life towards a final peace resting upon a sure foundation is made conscious and consuming, and it is his destiny alone to know that the truth towards whose beauty he is inevitably driven is such that in its sight mankind is like a little child which would make its unknown known by endearing words.<sup>15)</sup>

Murry の批評を通じて流れる厳しい芸術至上主義がすでにここに表われている。この芸術至上主義を奉じる彼の '*imagination*' は、現実に忠順を誓わないような種類の *imagination* ではない。科学の発達とはそれとは反比例に人間の「洞察力」を奪ってしまった。洞察力を奪われた想像は、「可視的なもののまわりに表象を作りあげるが、この種の表象形成は、その素材を現実の世界に求めないで一つのユートピアを求めるものだ」<sup>16)</sup> と J. C. Collis が Murry 論で彼の '*imagination*' に側光をなげている。自然と現実はあるがままの姿に

(15) *The Daughter of Necessity* (E. O. I. pp. 70—71)

(16) *Farewell to Argument* p. 392. Cassell, 1935.



において見なおされねばならない。そのみならず、われわれは自然と現実を純真に会得 (understand) する必要がある。つまり、‘image’ と ‘idea’ の同一化が達成されねばならないのである。「有機体を理解するために、われわれは理解力を放棄する必要があるなどというべきでない。むしろ理解力を超越せねばならぬというべきである。」<sup>17)</sup>

真実を求めるかぎり Murry はリアリスとであり、「人間は知的な秩序ではなく、有機的な秩序に属すものだ」というかぎり Murry はアイディアリストであるということができる。Murry の評論を読む場合、彼が用いる ‘reason’ や ‘understanding’ の含蓄には充分注意せねばならぬ。彼の解釈にしたがえば、‘understanding’ は ‘intellectualism’ より高い秩序に属すものであり、‘reason’ は ‘understanding’ と ‘emotion’ の滲透しあったものであるからだ。‘reason’ は結局「生の理解」なのである。Murry の *Reason and Criticism* からのつぎの引用によって、われわれは彼の ‘reason’ の概念を把握することができるであろう。

A great work of literature does not so much satisfy the reason  
as bring it to birth within ourselves. <sup>18)</sup>

Murry が ‘reason’ という語を用いる場合、そのコンテクストによって僅かながら微妙な意味の変差が認められるけれども、結局それは、知性と感性の総合によってなしとげられる靈性にはかならないのである。

以上簡単に Murry の最も初期の評論集 *The Evolution of an Intellectual* 中の主要論説を手懸りとして、Murry の批評の核心への出発点となるべき二三の点を指摘説明したが、この覚え書きが Murry と取組もうとする人人に何かの暗示ともなれば幸いである。

---

(17) *Countries of the Mind* (2nd Series) p.41. Oxford, 1931.

(18) *ibid.* p. 43.